



道行



運動シャツ、ズボン



猿股



脚絆



男児袴



股引

まちだかばま
襠高袴
(紙による試作)

腹掛



女袴



女児洋服



夜具

かくおび
角帯

シャツ

寄贈資料の中から

さいほうひながた
裁縫雛形

今回は、資料の中から裁縫雛形を紹介します。この資料は、大正中頃から昭和20年頃までの間に、学校で、裁縫を学ぶために製作された小型の衣服等です。縮尺は二、三分の一ですが、実物と同様に作られています。

裁縫雛形は、修業年月の短い女性達が合理的に裁縫を身につける方法として、明治7年頃に渡邊辰五郎氏により考え出されたものです。短期間で多くの勉強ができるうえに材料も少量で済むことから、雛形を使った教授法は全国に広まっていきました。

製作の際は、雛形尺という、裁縫に使われる鯨尺を三分の一に縮小したもののさしが使われました。大正13年にメートルの使用を定めた法律が施行されてからは、縮尺二分の一の雛形も作られるようになりました。

裁断や縫製は基本通りに行われ、着物はしつけがかけられ、仕上げにプレスされ正式に畳まれています。

洋服の衿・袖やボタンホール、ギャザーなども忠実に再現されています。これらは授業の課題であったため、多くの雛形に学校の検印が押されています。

道行^{みちゆき}というのは和装の女性用外套^{がいとう}です。褌^{つま}模様が^{ひとえ}入った単衣^{ひとえ}の着物は女性用で、本重ねという、単衣を2枚重ねた仕立て方がされています。夜具^{やぐ}は着物の形をした掛布団^{かけふとん}で、綿が厚く入っています。股引^{ももひき}と猿股^{さるまた}は下穿^{したば}きで、腹掛^{はらがけ}は職人^{はっぴ}などが法被^{ももひき}の下に着用するものです。脚絆^{きゃはん}は脛^{すね}を保護し、動きやすくするもので、旅行や作業時に用います。技術習得のため、衣服以外に櫛入れや油単など様々なものが製作されています。

この他に、シャツの襟部分^{はかま}、袴・ズボンの腰部分など原寸での習作や、婦人服、子供服や帽子、男児袴、小物入れなどの実物製作が行われており、授業の中で雛形を効率よく活用していた様子がうかがえます。

駿河湾の漁

川上 貢さんの漁話

漁のこぼれ話

・カジキ (写真1)

だいほうあみ
大謀網でバショウカジキ、マカジキ、シロカワカジキと色々なカジキが捕れたが、シロカワカジキが一番高く売れた。沼津ではカジキの口から延びる長い角をハスと呼んでいたが、南部の漁師たちはツノと呼んでいた。網を揚げる時にカジキが暴れてツノで網を破いてしまうことがよくあるため、なるべく暴れないように早く船上に揚げなければならない。船上に揚げると、暴れると危ないので、あらかじめ船に積んでおいた鋸でツノを切り落とす。特にシロカワカジキのツノは、ロープを締める時に使うスパイキという道具として利用された。

・クジラ (写真2)

大謀網に一度だけクジラがかかったことがある。大きなクジラだったので暴れて大謀網が壊されてしまった。クジラが暴れるため、なかなか尾びれにロープを回すことができずたいへん苦労をした。尾びれにロープをかけて思い切り引っばって固定し、動力船で2、3回回ったらおとなしくなった。船に揚げることができないので、曳航して陸に帰ってから解体し、魚市場に持って行った。クジラはいい値段で売れた。食べてもおいしかった。

・ウミガメ

南部の漁師たちは、ウミガメのことをカメと呼んでいた。1年に1回か2回はカメが大謀網にかかることがある。南部の漁師たちは、一旦カメを陸に連れ帰り、日本酒をカメの体にかけてやったり、一升瓶を口につけて飲ませるまねごとをやったりした。本当に日本酒を少しだけ飲ませていることもあった。何でそのようなことをやるのかは聞いたことがない。

・ザツギョ

イサキ、アジ、メジ(マグロの幼魚)など、集団でやって来る魚にはそれぞれの名前と呼んでいたが、それ以外の魚はザツギョ、もしくはザツという言葉でひとまとめにされた。魚市場において、イサキ、アジ、メジなどはそれぞれ数量があるので単独で競りに掛けられたが、ザツギョは数量がないので、サバ1匹とムツ1匹などザツギョをひとまとめにしてkg単位で競りに掛けられる。魚市場の競りに掛けられるため、食べられない魚はザツギョには入らない。

・渡り漁師

大謀網のオオダイボウ(船頭)は南部地方、岩手県宮古市重茂の出身でその周辺の港町から漁師たちを集めてくる。漁師たちの中には、あっちの定置網、こちらの定置網と渡り歩いている者がいた。オオダイボウ

はそうしたことを知らずに連れてくることがある。そういう者たちは食事がまずいとか仕事が忙しいとか難癖をつけてくるので、途中で帰ってもらったことがあった。南部の漁師たちは、皆、オオダイボウの知り合いというわけではない。色々な知り合いのツテを通じて集められてきた。



(話：川上 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市今沢在住)



写真1：船に揚げられたシロカワカジキ
(昭和35年頃 川上貢氏撮影)

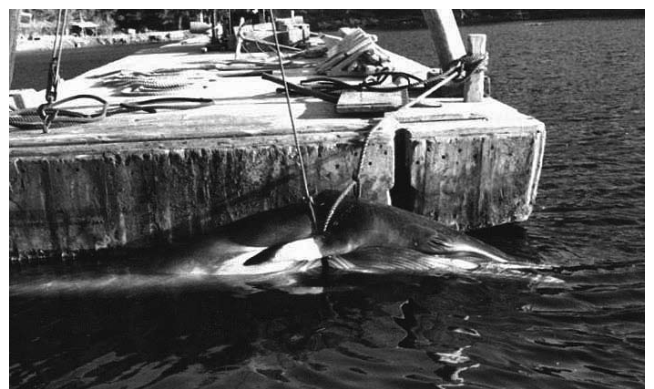


写真2：陸まで曳航してきたクジラ
(昭和32年頃 川上貢氏撮影)

川上貢さんには2年間に渡り昔の様々な漁業のお話を語って頂きました。今となってはどのお話も非常に貴重なお話です。この場を借りてお礼申し上げます。

沼津の石丁場遺跡3

内浦重寺地区

今年は徳川家康没後400年の節目に当たり、県内では徳川家康にまつわる行事が行われています。駿府城で亡くなった家康が最初に葬られたのが、近年国宝に指定された久能山東照宮（静岡市）です。駿河湾に面する断崖の上に立つお社は、江戸時代に何度か修復されていますが、この時石垣などの補修に使われた石が沼津から運ばれたことをご存知でしょうか？

江戸時代に「津元」と呼ばれ、内浦地区で地元の漁師を束ねていた家の一つである室伏家には、採石に関する古文書が数多く残されています。この記録から、当地での採石の歴史は江戸時代の初めまでさかのぼり、重寺の地から切り出された石は、遠く江戸城の石垣にも利用されたことがわかります。そして石が切り出された場所の一つが淡島です。



長井崎から見た淡島（右端に獅子岩に続く岩盤の露頭が見られる。左裾に柱状節理の扇岩がある。）

淡島丁場

淡島は江の浦湾にうかぶ急峻な島です。山頂付近には島名の由来となった淡島神社が祀られ、海岸付近にはホテルや水族館があり、島全体がレジャー施設になっています。この島はマグマが地表付近で固まることにより生成された岩石からできていて、島の西側には柱状節理と呼ばれる六角柱の石が扇状に連なった扇岩があることもよく知られています。伊豆地方が火山からできていることを理解できる貴重な自然遺産であり、伊豆半島ジオパークを構成するジオサイトの一つにも挙げられています。

淡島の海岸線には遊歩道が整備されていて、30分ほどで一周することができます。この時、波打ち際をよく観察してみると、石を割るためにあけられた「矢穴」が残る石を見つけることができます。また、淡島神社へ登る参道沿いにも、固い岩盤から石を剥ぎ取ろうとした痕跡を見ることができます。

淡島と採石の歴史

今でも淡島の各地に残っている石を切り出した遺構の数々は、古文書の記述から、主に17世紀後半から18世紀前半にかけてのものだと考えられます。切り出した石は久能山東照宮だけではなく、駿府城や浅間神社（いずれも静岡市）にも使われたそうです。特に、駿府城は地震や大雨によって石垣が崩れる被害がたびたび起きており、その修復のため重寺から切り出した石が何度も使われていました。

それより以前の17世紀前半では、江戸城の石垣用の石材として石が採られていました。古文書には、元和6年（1620）ごろは江戸の町人が、寛永6年（1629）ごろには、駿河大納言徳川忠長、寛永12年（1635）ごろには越前松平家などが石を切り出したと伝わっています。この時期、沼津市内の戸田や井田、西浦地区でも江戸城のために多量の石が切り出されています。

このように長い採石の歴史を誇る淡島ですが、島内の石は節理が発達していて大きな石を採ることは容易ではありません。このため当時の淡島の様子を記した肥後細川家の古文書には「あわ嶋 石は悪候へ共、石場能御座候」と書かれています。淡島の石の質は良くないものの、石を切り出して船で運ぶのにはとても便利な地であったようです。このように、経済的な理由から石場としてこの地が選ばれ、長期間にわたって石が切り出されてきました。

（仮称）大洞丁場

淡島の対岸にある重寺集落の後方には、淡島と同様、火山の火口付近でマグマが固まってできた山である金桜山などがそびえています。この地にも江戸時代から石を採った遺構が残っており、地名から仮に大洞丁場と呼んでいます。ここからは、写真のような「卍」（まんじ）の刻印がある石が見つかっていて、現在詳しい調査を進めているところです。



（仮称）大洞丁場の卍刻印石

魚見のある風景⑧ 内浦重寺(淡島)



上の写真は、沼津の蘭契社から発行された絵葉書です。小型の漁船の中に四本柱の櫓が立てられ、その上部に編み物の囲いのようなものが巡らされており、おそらく床が敷かれ、その中にトンボ笠をかぶった人が立って下を覗いています。延ばした柱の先に棒を渡し、手すりのように使っています。奥の船べりにはゴザのようなものが掛けられ、光線をさえぎっているようにも見えます。船の右側には網綱に付けられた竹束らしい浮子のようなものが延びています。写真の表題は「沼津海岸魚見張り根遊舟」とあります。場所は、背景に香貫山や松原と海辺の石垣らしいものが見えるところから対岸の内浦のようです。ヒントになるのは次の写真です。

右の上の写真は、原植松家の「三津名勝 淡島漁場」と題する絵葉書で中央に魚見の載せられた船とその両側に大きな船が写っており、網綱のようなものが巡っています。正面の山は姿を消した大久保の鼻のようです。

さらにその下の重寺秋山家の「重寺淡島」の絵葉書を見ると、右端に小さく同じ船が写されています。他の写真と比べて見ると、岬の先端に立つ特徴的な松の



姿から、内浦重寺の淡島の北東隅で、手前の小さな入り江は現在、淡島ホテルの建っている辺りであることが分ります。

表題にある「根遊舟」とは何のことでしょうか。魚が網に入るのを見張っているようですから、定置網が仕掛けられているようです。ここには大正時代に「根拵網」(ねこさいあみ)という定置網がありました。網に入った魚が逃げないように見張りが必要でした。「遊」は「拵」の誤字のようです。

資料館からのお知らせ

社会科見学にどうぞ！

館の二階の常設展示は、生活用具です。昭和30年代のおじいちゃん、おばあちゃんの時代に使われたいろいろな生活道具が展示してあります。手作りの道具ですが、いろいろな工夫が凝らされており、昔の人の知恵や苦労がしのべれます。

学校の社会科見学できたことがある人も、もう一度ゆっくり見てください。



なにかわからないことがありましたら、事務室で質問してください。写真は、五小の皆さんの社会科見学の様子です。

沼津市歴史民俗資料館だより

2015.3.25 発行 Vol.39 No.4 (通巻205号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp